

「田舎って、

どんなところ？」その4

生かすも殺すも親次第

リゾート
カントリーマーケット 里贈人

栗井 文子

冬期間になると、農繁期の間、忙しくて中々集まる事も出来ないせいかフォーラムや研修会等、行事が目白押しに各地で開催されています。

私が若かりし頃は、農業は仕事キツイ・汚い・危険の三Kの産業という概念が広く一般的には言われていましたが、今、活き活きと生活や仕事を楽しみながらメディアの世界の人達からも注目を浴びているような農家の人達は、経営能力や企画力が豊富で希望に満ちていて、新しい意味での三Kの産業として農業と向き合い、楽しんでいるように思えます。

私達の親世代では、相手の顔を結婚式まで一度も正面に見た事が無いまま農村では嫁ぐという事もよくあったと聞

きます。今では信じられない

結婚の形態やその後の生活を営んできた人も多かったのですが、近頃話題になるような農業者は生まれつきの農家生まれの娘を嫁にするという人よりも、非農家やOしをしていたというような異業種や、他府県から何の知識も偏見も持たずに農業の世界に魅せられて結婚した人や、新規就農などで苦勞の末に今の農業の形態を築き上げてきたような、逞しい精神力や好奇心旺盛な人が多いように思います。何の先入観も地域の常識も殆んど知らないがために、側から見ると「何を考えているんだらう?」と思うような既存の農家では思いもつかないような事を平然と実行に移してしまうような、逞しい行



粟井 文子 (あわい ふみこ) さん

埼玉県生まれ。

大宮保育専門学校卒業後、江別の町村農場に実習したのが縁で結婚、就農することになる。

H7年に農水省が開講したグリーン・ツーリズム専門家講座を受講したのがきっかけで、H9年6月に自宅の一角に、直売所を兼ねた農業情報公開の店をオープンさせる。

農村社会のことを広く多くの方にとって貰いながら、興味・関心を深めて農業応援団を育てたいという思いから、H10年には貸農園も始めた。

粟井農園 カントリーマーケット 里贈人
江別市西野幌 127 番地 2

動力も兼ねそなえた人が多いのではないのでしょうか。

親世代が仲良く楽しそうに仕事をしていて、生活の上でもそれなりの楽しみを持っていくような後姿を見ながら育った子は、周囲や親が何も言わなくとも自然と後継者として育つ事が多いように思います。機械化に頼らず、子供の出来る仕事を幼い頃から自然のうちに与え、家族の一員として労働力として認めたら、

自分も家族の役に立っているんだという自覚を持つ事が出来るし、農業と子育ての接点在日常生活の中で知らぬ間に築けているような家庭では、後継者問題で悩む人は殆んどいないのではないのでしょうか。子供は正直です。自分の母親の幸せそうな笑顔や楽しい家

庭の雰囲気の中で育つと、世に言う刷り込み現象のようにそれらの事を捉え、自分も親の仕事を継いで認められたいとか、年々老いていく親の労働力を軽減させてあげたいと、自然と思うようになる事が多いのではないのでしょうか。

ただ、今の農村社会は、やっとなん男女共同参画（イクォールパートナー）という言葉が始めたばかりで、実際にはJAの役員や女性農業委員の数だって、まだほんの数%にしかならず、たとえば役員会や議会の中で発言をしても、大多数を占める男性の論理で殆んどの場合、それらの意見（発言）は握り潰されてしまっています。

社会の尤も大きな組織である国会の場ですら、女性議員

の声はあまり聞いて貰えていないのが現実です。お題目のような政策で聞こえの良いスローガンを掲げたって、初めから真面目に取り組むと、真剣に人として向き合ってくれている人がどれだけいるのでしょうか。

僻みでも妬みでもなく、自分にとって有利（有益）な今までの立場や居場所をそういう易々と譲ってくれる人など、今の世の中に存在するのでしょうか。まあ、私が出会った素晴らしい男性諸氏の中にはごくまれにそういう人もいらっしゃると思います、「爪の垢を煎じて飲ます」という言葉を、その爪の持ち主の方のように変えたいと思うような人に飲んで貰えたら、そして実際に飲んだ人が変わるもの

なら試してみたいものです。

ここ一〇年位の間、道内外を問わず、グループや個人であちこちの優良農家や優良地区の視察研修を私自身して見て解った事なのですが、今現在脚光を浴びているような農家や農村地域は、現役の農業者の魅力やバイタリティー



溢れる行動力の裏側に、必ずそれを理解し支えてくれる親世代の影の力が存在している、ということ。技術や経験が未熟な若い世代の人の言葉であっても、それをきちんと受け止めて後押しする姿勢を持った魅力的なお年寄りの言葉を聞く度、

「あー、こういう人達が居るから、この家（この地域）はこんなにも素晴らしいんだ」という事が一目瞭然として解りました。年は重ねていてもそういう方と話をすると、年齢や時の過ぎていくのも忘れてしまう程、話に聞き入ってしまいますもの。それと、意外に勘違いされているのですが、

道外の農村の方が意識改革が進んでいて、女性の地位がきちんと認知されている所が多いという事。まあ、その背景には道外の農業の主たる働き手は女と老人という事が有るのでしょうが。「農業王国北海道」などと聞こえの良い言葉の裏側では、道外と違って農業の主導権を握っている立場の人が、道内では圧倒的に男性が多いという力関係からか、封建的で女性や老人に対しての評価が一つ低い地域が多いという事実が、他府県にまで風評として伝わっているという現実を何とも思わない（恥ずかしいとも感じない）人が、男女を問わず多いという不可思議な現象が罷り通っているという事です。

ひと昔前、文字を読めない

人は文盲と呼ばれていましたよ。農村社会には意識の上で知らされていない現実や、

意識を芽生えさせようとする力を潰そうとする故意の力が、慣習だ伝統だなどと尤もらしい理由付けの上で成り立っています。私は、それを意識上の文盲のように感じています。

何故、自分が色々な目に見えにくい力で押さえ付けられ、虐げられているのかさえ気付かず、に生活する人を見て、心がチクチク痛みます。知らなから、知らされていないから上手くいつている所もあるかもしれないし、寝た子を起すようなことを態々たいたいしなくとも、今のままでも自分は充分幸せだと思っている人もいるのでしようが、時々、幸せの価値感について「今のまま

で本当に良いんだろうか？」と自問自答をしてしまうことが多々あります。

都会でも農村でも、男でも女でも、そんな事は本当はあまり関係の無い事なのではないでしょうか？ その前に、一人の人間として、如何に自分の人生や家庭や地域を一人一人がどれだけ真剣に考えて生きていけるか、という事のほ

うが大切なような気がします。田舎は、そういう事を再認識するために、昔から、世界のどんな貧しい国の中でも存在してきたような気さえしています。

適齢期なんて今は無いと世間では言われていますが、医学的に見れば人間の生殖能力や機能が正常に機能し、過剰な医療技術を使わなくても、

母子共に健全で安心して子孫を残していける年齢というものは本来有ると思います。ただ、農村では男を後継者と考

結局の所、日本の農業を消滅の道に追い込んでいるのが農家自身だという事すら気付いていない。貴方の家は大丈夫ですか？子供の将来の芽を伸ばすも芽を摘むのも、実際は私達親の日常の積み重ねの結果なのです。

期になったと勝手にそれまでとは打って変わって、親に「彼女はいいの？結婚は？」と心理的に追い込まれ、拳句の果てに「何を考えているんだか・・・。」と、見放されたような立場に立たされている現実が有ります。そういう息子を育てたのも自分達親だと自覚すら持たない人が、愚痴だけはこぼし、まるで自分の息子に嫁が来ないのは農業をやっているからだとか、息子に甲斐性が無いからだと思

人間、何事も諦めの境地になつたら、その時点でその事は叶わぬ事となってしまうのです。今、子育てをスタートしたばかりの人、子育て中の人、後継者に伴侶をと考えている人。気付いた時が今までの考え方を変える、その時だと頑張つて下さい。

込んでいるから始末が悪い。

日本の農業の未来を案ずるなら、親として心を鬼にして遅い子を育てましょう。今より明るく楽しい農村を、次の世代に残していくために。